

優秀賞

「不知火（しらぬい）」

浅淵聡美

SE 不知火を待つ人々の声

夏の夜の八代海に出現する蜃気楼の一種

『不知火』を一人で見に来ていた萌乃は、同じく一人で見に来ていたすずかに声をかけられ暗闇の中、行動を共にすることになる。

萌乃M「8月の終わりに現れる蜃気楼の一つ、不知火。真夜中の八代海には県内外から多くの人々が訪れる」

萌乃は死んだ恋人が不知火をなぜ見たがっていたのかを知るために、すずかは自分を捨てた恋人を捕まえるためにやってきていた。

すずか「暑く。少しくらい風、吹いてよ」  
萌乃M「不知火は風のない日」

行動を共にしていくうちに打ち解けていく二人だったが、わずかな光で見えなすずかの顔からお互いの恋人が同一人物であることに萌乃は気づいてしまう。

すずか「もー、暗いから何にも見えない」  
萌乃M「月がすべて欠けた新月に現れる幻の光」

登場人物

泉 萌乃 (22)

神野すずか (26)

すずか「つていうか、不知火、まだ？」

萌乃M「けれど、必ず見ることが出来るわけではなく——」

SE 周りのカップルたちが、すずかに対

してヒソヒソ話す声。

萌乃M「――私、だ」

よね」

萌乃M「…え？ 心、読まれた？」

すずか「何よ。うるさいのはそっちでしょ」

すずか「女性の一人は目立つからさあ」

萌乃「…え。はあ」

すずか「何？」

萌乃M「(ため息) さつきから、隣の女性の独

すずか「ああ、急に話しかけられてびっくりし

萌乃「…あ、いえ」

り言が怖い」

た？ 女のぼっち、私だけかと思っていた

すずか「泥棒だとも思った？」

から、親近感っていうか、つい」

萌乃「はあ？」

すずか「あー、カップルばっか」

萌乃「親近感、ですか」

すずか「だって、ほら、暗闇で人ごみで観光目

萌乃M「確かに、多いけど」

ラとかスマホとか持ってなかったし」

ない？」

萌乃「ああ、確かに不知火が出たら撮りますね、

萌乃「――泥棒さん、なんですか？」

すずか「多いよね。ね」

普通」

すずか「そんなわけないでしょ。むしろその

萌乃「――え？」

すずか「でしょ。でも、私たち、手ぶら(笑

逆。泥棒を捕まえにきた。今日ここにきて

すずか「何か、あれだね、カップルが真夜中に

う)」

いるはずなんだよね」

って、本当に不知火が目的なのかな。ね」

萌乃「何かとられたんですか？」

萌乃M「もしかして私に話しかけてる？」

萌乃M「私の本当の目的は不知火を見るため

すずか「男」

萌乃M「もしかして私に話しかけてる？」

じゃない」

萌乃「男って、彼氏さん、ですか？」

すずか「夕方から、いたよね」

すずか「私、不知火を見に来たんじゃないんだ

すずか「そ。突然、何も言わずに新しい女のと

すずか「夕方から、いたよね」

すずか「私、不知火を見に来たんじゃないんだ

ころに行ってしまった。あのクソ男、見つけ

たらただじゃ置かない。女ともどもぶん殴  
ってやる」

萌乃「でも、こんな暗いんじゃない」

すずか「声で探すの。ほら、さつきから、カップ  
ル、べらべらしゃべっているでしょ。あいつ  
の声、どんな暗闇でも絶対わかるからさ」

萌乃「はあ」

すずか「でもさー、私が近づくとみんな声をひ

そめるんだよね」

萌乃「(笑ってしまう)」

すずか「何で笑うのよ」

萌乃「それはあなたの独り言が——」

すずか「独り言？ 私が？」

萌乃「気付いていなかったんですか(ヤバい  
人だなと思って)あの、えっと、じゃあ、私は

ここで失礼します」

すずか「帰るの？」

萌乃「その先の神社に」

すずか「何で？」

萌乃「何でって…不知火がよく見える場所だ

から…」

すずか「へー、じゃあ、私も一緒に」

萌乃「え!? ついてくるんですか!？」

すずか「女二人だったら、独り言じゃないでし  
よ」

SE 歩き出す。

すずか「ねえ、あなたも振られたの？」

萌乃「何でそうなるんですか!？」

すずか「私たち、似た者同士じゃない」

萌乃「…はあ。まあ、そんな感じです」

すずか「——不知火、見たいって言ったの、あ  
いつなんだよね」

萌乃M「…優馬さんもそうだった。病室で『不

知火がみたい』って」

すずか「あいつも私も地元がここで」

萌乃「——どんな人だったんですか」

すずか「口が悪い。あいつに言わせれば私の方  
が悪いっていうんだけど。いつとも会えば

喧嘩ばかりで」

萌乃「…いいなあ」

すずか「よくないよ」

萌乃「してみたかったなあ、喧嘩」

すずか「あれ？ 喧嘩したことがないのに別  
れるってことあるの？」

萌乃「…それは——」

すずか「相手の気持ちなんて結局のところ、わ  
からないもんね」

萌乃M「…優馬さんは最後まで私に優しくかつ

た。でも、残された優馬さんのスマホには前  
の彼女の写真しかなくて…私のは一枚もな

くて」

すずか「あいつが言うんだ。不知火はめったに

見られないから、見たらラッキーなことが

おこるんだよって。だから絶対、今年、見に

行くんだって」

萌乃M「私がここに来たのは…優馬さんが不

知火を見たがっていた理由を知るため」

すずか「何か叶えたいことがあったのかな、あ  
いつ…」

萌乃「(つぶやく)…もつと生きたかったん

だろうな…」

すずか「…え」

萌乃「あ。なんでもない」

すずか「今、生きたかったって…」

萌乃「忘れて」

すずか「ねえ、あなたの彼氏…もしかして」

萌乃「だから、何でも——」

すずか「別れたって…そっちの別れ？うそで

しょ…(泣きそう)」

萌乃「ちよつと、え、ヤダ」

すずか「ごめ…マジでごめん」

萌乃「何で泣くのよ」

すずか「私と一緒にしちゃって。ごめん」

萌乃「会ったばかりの他人なのに…もう、泣か

ないで…」

すずか「だって…だって…」

萌乃M「優馬さんの前の彼女は気が強いくせ  
に泣き虫で…『俺になにかあったらあいつ

もきつと…』一度だけそう漏らしたことが

あった」

萌乃「ねえ、神社、着いたよ、ほら」

SE 立ち止まる。

SE 不知火を待つ人々の声。

すずか「うわあ、海も空も真っ暗…」

萌乃「ここからだど、八代海が一望できる」

すずか「あ。不知火」

萌乃「あれは漁船の光。あの光がいくつにも反

射して見えたら、それが不知火」

すずか「でもいくつにも見えてるような」

萌乃「それは涙でにじんで——」

すずか「もう泣いてないよ。ほら、見て」

萌乃M「神社のかすかな明かりで見えた彼女  
の顔」

すずか「ね。泣いてないでしょ」

萌乃M「——優馬さんのスマホに残された彼  
女と同じ顔がそこにあった」

すずか「(ん?) どうかした？」

萌乃「…あなたの名前——」

すずか「言っでなかったね。すずか。神野すず  
か」

萌乃M「すずか…優馬さんの前の彼女の名前」

すずか「あなたは？」

萌乃「(え…ああ) 萌乃…泉、萌乃」

すずか「萌乃かあ。いい名前だね」

萌乃M「すずかさんは、彼氏を奪った女が誰か

知らない」

すずか「…私さ…ぶん殴ってやるってここに

来たけど、本当は…そうじゃないんだ」

萌乃M「私もスマホの写真でしか彼女を知ら

ない」

すずか「…：本当は…もう一度だけ、会いたく

て…どんな形でもいいからもう一度…」

萌乃M「…今なら、まだ大丈夫…：ここから何事

もなく立ち去れる」

すずか「—ありがとう、ね」

萌乃「…え？」

すずか「心細かったんだ…一人でここに来て

萌乃が一緒にいてくれてよかった」

萌乃「お礼なんて、私」

萌乃M「本当はわかっていた。優馬さんが不知

火を見たがっていた理由」

すずか「ありがとうね」

萌乃M「彼女の幸せを願うため」

すずか「しかし、不知火、出ないね」

萌乃M「優馬さんはすずかさんを悲しませた

くなくて彼女の元を去ったことも」

すずか「ねえ…よかつたらなんだけど、萌乃の

連絡先、聞いちゃ、ダメかな？」

萌乃M「私は優馬さんに愛されてなどいなか

った」

すずか「…黙ってるってことは…ダメって、こ  
と、かな」

萌乃M「…私は優馬さんを奪ったけれど、ずつ  
と彼女のこと憎かった。だから絶対、言わな  
い。優馬さんのことは絶対…言わない」

すずか「ごめん、今の忘れて。会ったばかりな  
のに…もう、私ったら、ずうずうしいとい  
うか、いっつも、そう」

萌乃M「…絶対に…言わない…絶対に(声が  
小さくなる)言わな…」

すずか「ねえ、どうしてずっと黙ってるの？」

萌乃「…(ぼそっと)殴って」

すずか「へ？」

萌乃「殴って。私を」

すずか「何で萌乃を殴るのよ」

萌乃「お願い」

すずか「私が殴るとしたらあいつとその女」

萌乃「だから、殴って」

すずか「え？まさか…」

萌乃「…お願い…」

すずか「…うそでしょ…萌乃が優馬を」

対話さなかった…」

SE 周囲から「不知火が見えた」「きれい」

などの声。

萌乃・すずか「え!?!—あ。不知火」

萌乃M「めったに見ることができない幻の光

…もし、見ることができたらラッキーなことが起こる」

無音

すずか「—ってことは、死んだ彼氏っていう

のは、優馬？」

すずか「ねえ、私たち、こんな形で出会えたこ

とは…ラッキーなの？」

萌乃M「…わからない」

SE すずか、倒れこむ。

萌乃「すずかさん、大丈夫!? 起き上がれ

る?」

萌乃M「漆黒の海に列をなして輝く光の玉を

私たちはただ、見つめていた」

すずか「(泣く) こんな形で出会わなければ

…あなたのこと、あなたのこと—」

(終わり)

萌乃「…私もこんな形で出会わなければ…絶